

Title	日本漫画産業の特異点「ときわ荘」における事例分析：コンテンツ産業における人材集積拠点形成メカニズムへの示唆(人材問題(3), 一般講演, 第22回年次学術大会)
Author(s)	河尻, 耕太郎; 前田, 征児; 竹内, 寛爾; 金間, 大介
Citation	年次学術大会講演要旨集, 22: 1144-1147
Issue Date	2007-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/7485">http://hdl.handle.net/10119/7485</a>
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

## 日本漫画産業の特異点「ときわ荘」における事例分析

## ～コンテンツ産業における人材集積拠点形成メカニズムへの示唆

河尻耕太郎（産業技術総合研究所）

前田征児，竹内寛爾，金間大介（文部科学省科学技術政策研究所）

本稿では、マンガ産業の特異点である「ときわ荘」を事例に、人材が集積する過程を踏まえ、集積した人材が飛躍的に成長するメカニズムを明らかにするとともに、今後の産業育成政策への示唆を提供する。市場の変化に対応して、人材と市場の「ゲートキーパー」である編集者と漫画家の両者が極めて合理的な意思決定を行い、その結果としてときわ荘という生産システムが生みだされた。また、人材の集積と、それに伴う濃密なコミュニケーションにより、拠点に集積した人材が飛躍的に成長を遂げていった。

## 1. はじめに

競争力のある産業の歴史を紐解くと、ある時点において極めて特異的に、その国の産業競争力を向上させるような人材が集積する拠点が生まれることがある。それは、アメリカのシリコンバレーやハリウッドのように、産業として地理的広がりのあるものや、もしくは著名な企業や大学のように固定化された組織体として持続的に活動を続けるものもある。共通するのは、ひとたび社会から拠点として認知されると、まさに成功が成功を呼ぶように、拠点が成長する好循環が生まれ、国の産業競争力を飛躍的に向上させる。

古くから日本は、自動車や半導体など、伝統的に製造業において強みがあることは知られているが、その一方、アニメーションやゲームなどのコンテンツ産業においても、世界的に高い競争力を有している。近年、ポケットモンスターや宮崎駿の映画などが世界的にも大成功し、極めて高い評価を得たことは記憶に新しい。Joseph S. Nye は、文化や芸術などの影響力をソフト・パワーとして定義しており[1]、世界に日本のプレゼンスを発揮するという意味でその貢献は計り知れない。しかし、日本のコンテンツ産業は最初から競争力があつたわけではない。戦後のある時点において、飛躍的にその競争力を向上させたのである。その競争力の向上に大きく貢献したのが、手塚治虫や石ノ森章太郎などの、戦後の漫画産業黎明期に活躍した漫画家達であることは良く知られており[2-3]、当時の漫画産業の歴史を紐解くと、まさに人材が集積した拠点が存在していた。それが「ときわ荘」である。

そこで本稿では、日本の漫画産業における特異点である「ときわ荘」を事例に、有能な人材が集積し、飛躍的に成長するメカニズムを明らかにすると共に、今後の産業政策に対して普遍的な示唆を提供することを目的とする。

## 2. ときわ荘について

ときわ荘とは、東京都豊島区に 1952 年から 1982 年にかけて存在した木造モルタル造りの 2 階建てアパートである。当時、漫画雑誌出版社「学童社」が、1953 年に自社の雑誌で連載を持つ手塚治虫をこのアパートへ入居させたことが、ときわ荘が漫画産業の拠点となるきっかけである[4]。ただし、手塚治虫がときわ荘で暮らした期間は約 2 年と短く、外泊することも多かったため、居住空間としてはそれほど利用してはいなかった。しかしその後、後述する若手の新人漫画家達が集積するようになり、徐々に漫画家達の梁山泊のような観を成していったのである。

手塚治虫以降に入居したのは、地方から上京してきた、1930 年代生まれの若手漫画家 10 名である。最初に入居したのは寺田ヒロオで、学童社の編集者に紹介されて 1953 年にときわ荘に入居（1957 年転居）。藤子不二雄（藤本弘、安孫子素雄）は、安孫子素雄が手塚治虫を訪ねて上京した際に、寺田ヒロオを紹介されて意気投合し、彼の誘いを受けて 1954 年に入居（1961 年転居）。鈴木伸一は、1955 年に寺田ヒロオらをたよって入居（1956 年転居）。森安なおやは、寺田ヒロオらの勧めによって 1954 年に鈴木伸一の部屋に同居（1956 年転居）。石ノ森章太郎は、当初ときわ荘近くのアパートに入居していたが、程なく寺田ヒロオよりときわ荘の部屋に空きが出たとの知らせを受けて 1956 年に入居（1961 年転居）。赤塚不二夫は、石ノ森章太郎がときわ荘に入居すると同時に彼の部屋に同居し、後に別室を借りる（1961 年転居）。よこたとくおは、当初赤塚不二夫と下宿に同居していたが、彼が石ノ森章太郎とともにときわ荘に入居した後、1957 年に入居（1960 年転居）。水野英子は、現在の講談社の編集者に見出され、1958 年に石ノ森章太郎、赤塚不二夫と合作を書くために入居（4 ヶ月後に帰郷）。

### 3. 研究方法

本研究では、ときわ荘関係者の著作の中から、ときわ荘入居当時を回想している記録の抽出を行い、それらの記録の統合、比較を行うことで事実関係を明らかにし、一般的傾向を見出した。

定量的なデータとしては、出版科学研究所による出版指標年報から各雑誌の発行部数のデータを引用した[5]。また、国立国会図書館の蔵書検索システム(NDL-OPAC)により、漫画単行本のデータを抽出し、漫画家の人数や、漫画家の作品点数などを分析した。NDL-OPACにおける検索方法は、まず書籍の分類項目から漫画単行本を示す項目(NDC分類の726.1の項目、NDLC分類におけるY16、Y84)で漫画単行本全体の集合をつくり、これと著者標目条件とのAND検索を行うことで、各漫画家による単行本の集合の抽出を行った。

### 4. ときわ荘形成のメカニズム

ときわ荘が形成されたのは、次の3つの要因(①市場の動向、②産業の構造、③個人的な動機)による。

図1に漫画雑誌発行部数の年度推移を示す。まず市場の動向であるが、当時はまさに戦後の漫画産業の隆盛期であり、その駆動力となったのは、1949年をピークとする戦後の第一次ベビーブーム世代である[6]。ベビーブーム世代が幼年期に脱しつつあった1959年に、我が国初の児童向け週刊誌である「週刊少年マガジン」(講談社)、「週刊少年サンデー」(小学館)が創刊され、青年期に差し掛かった頃に青年向けのコミック誌が創刊された。特に、漫画産業の構造を大きく変えたのは、月刊誌から週刊誌へのシフトである。当時、一般家庭へのテレビの普及が進み、ベビーブーム世代が幼年期を脱しつつあったことが、児童漫画を主とする漫画産業全体の大きな懸念事項であり、週刊誌の創刊に踏み切らせた[7]。業界全体が週刊誌の方へシフトすることで、漫画の生産サイクルが大幅に短縮され、生産性を飛躍的に向上させる必要に迫られたのである。この不連続かつ大幅な需要増に対応するため、各社は著名漫画家の獲得競争にはしるとともに、足りない部分については、新人漫画家の起用によって補った。

次に、産業構造上の理由であるが、漫画の制作プロセスを考えると、一つところに漫画家が集積するよう力が生じる[8]。その第一の理由として、編集者との綿密なコミュニケーションがあげられる。編集者は市場の動向や、顧客のニーズ、漫画家の特性などを良く知っており、それらの知見に基づいて、製作工程上流において漫画家とテーマについて意見交換を行う[7]。また、締め切り前の原稿の催促や、漫画家の逃走を阻止するため、製作期間中も監視する必要があった[7]。

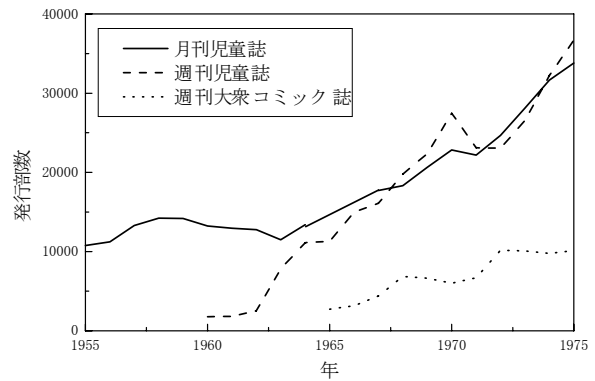


図1. 漫画雑誌発行部数の年度推移  
(出版科学研究所のデータを元に著者が作成)

さらに、出来上がった漫画に対しても品質の向上のために修正を求めることもあった。そのため、漫画作成の各製作工程において編集者と漫画家は密接にコミュニケーションをとる必要があり、新人であればよりその傾向は強かった。しかし、当時は主な連絡手段は電報や手紙などであり、意思疎通における制約条件が厳しく、編集者と漫画家が地理的に近くに居住することは極めて大きな利点であったのである[7]。出版社が、手塚治虫、寺田ヒロオ、水野英子にときわ荘を紹介したのはそういった理由からであった[4]。第二の理由として、漫画家同士での仕事の助け合いである。漫画産業においては、仕事の依頼は著名な漫画家に集中することが知られており、一人の著名な漫画家がいくつもの連載をてがけることは珍しくない[8]。しかし、漫画の制作は極めて労働集約的な作業であり、その作業量には物理的な限界が存在する。当時は徒弟制度的な手伝いはあったものの、現在のようなプロダクション制度は完全に確立されてはいなかった[6]。まして、若手の漫画家がアシスタントを雇うことなどは実質的に不可能であり、当然全ての作業を一人でこなさねばならなかった。そのため、当時の若手漫画家同士の間では、しばしば仕事をこなさきれなくなる自体に直面した際には、互いに制作の手助けをすることが慣行となっていたのである。ときわ荘のように漫画家が集積していれば、お互いの仕事を助け合う上で非常に大きなメリットであった。こういったスケールメリットについては、編集者側も意識しており、著名漫画家が仕事をこなさきれなくなった際や、新しい企画などを持ち込む際にも、ときわ荘に持ち込めば大丈夫だという安心感があった[7]。最後に、情報の集積である。基本的に原稿の依頼は、極めて俗人的なやり取りの中で決まっており、編集者が多く出入りするときわ荘にいて、そういった機会が得られる確率が高かった。以上のことから、出版社の近辺に漫画家が集積することは、両者にとって大きなメリットであった。

最後に、個人的な動機であるが、これもいくつかの項目にわけられる。まず、生活上の動機である。1959年時の安孫子素雄の確定申告書を見ると、年収95万円とあり、課税所得57万円を差し引くと、月の生活費が3万円ほどである[9]。しかしこれは彼が漫画家として軌道に乗った後の収入であるから、入居当時の状況はより指し引いて考える必要がある。当時の回想によると、一人暮らしで慎ましく生活した場合、食費が4000～5000円かかり、光熱費などを考えると、ときわ荘の家賃3000円が、駆け出しの漫画家にとっての上限だったと推測される[10]。次に著名な漫画家へのあこがれである。当時の若手漫画家にとって、手塚治虫は神のような存在であり、その近くで働きたいというのは大きな動機であった。また、気心の知れた仲間達と同居できるということも大きな動機となっていた。ときわ荘に集まった漫画家は、その多くがときわ荘に入居する前から顔見知りであった。当時は、学童社の「漫画少年」誌に投稿、入選することが、新人漫画家にとっての登竜門であり、ときわ荘のメンバーはその常連であった。寺田ヒロオを中心として結成された「新漫画党」[11]や、石ノ森章太郎を中心とした「東日本漫画研究会」[12]は、ときわ荘入居前から漫画家コミュニティとして活動しており、ときわ荘に入居したのは、その中心メンバーの中で地方から上京してきた者達であった。特に、寺田ヒロオの存在は大きく、金銭面や、技術面、精神面など、様々な側面からメンバーをサポートしていた[11]。従って、そういった気心の知れたメンバーが先に入居していたことが、ときわ荘に入居する強い動機となっていた。

以上の3つの理由により、漫画家、特に地方から上京してきた若手の漫画家達がときわ荘に集積するメカニズムが生まれたのである。

## 5. ときわ荘における人材成長メカニズム

今から当時の入居者の顔ぶれをみると、まさに漫画産業を代表する漫画家達が集まったかのように見える。しかし、彼らがときわ荘に入居した当時は、先の見通しもつかない、駆け出しの若手漫画家の一人に過ぎなかった。彼らがときわ荘入居後に飛躍的にその能力を開花させ、次々と有名になっていく過程において、ときわ荘はまさに漫画産業における聖地のような存在となったのである。他にも、つのだじろうや永田竹丸、長谷邦夫など、頻繁にときわ荘に出入りし、後に大成した漫画家も多い。図2に、国立国会図書館に所蔵されている1930年代生まれの各漫画家単行本の、1940年から1999年までの発行点数合計と、その人数分布を示す。1930年代生まれの漫画家による単行本は9265点であり、計上された漫画家は909人にのぼる。

しかし、その半数以上は1冊のみの計上で、10冊以上書いている漫画家は全体の1割足らず、100冊以上書いている漫画家はたったの18人しかおらず、生産構造は非常に偏在性であった。表1に、単行本の発行点数が多い漫画家順に、発行点数と順位を示すが、上位10位以内にときわ荘の漫画家が4名(表中の藤子不二雄は藤本弘、安孫子素雄2名分を合計)入っており、発行点数の点からもその実力は群を抜いている。このことから、彼らが後年如何に高い生産性を誇っていたかが伺える。この成長の要因について以下で述べる。

まず、ときわ荘が他の拠点と根本的に異なるのは、職場と生活の場を兼ねている点である。狭い空間で寝食を共にすることで、必然的に極めて頻繁にコミュニケーションをとることになる。また、前述の通り、漫画家と編集者は綿密なコミュニケーションをとる必要があるため、漫画家が集積していると、編集者と接触を持つ機会が多くなる。そして、人材が集積し、漫画家同士、あるいは編集者とが綿密にコミュニケーションをとることで、①機会、②精神面、③技術面の3つの側面で大きなメリットがあった。

まず機会であるが、前述の通り、ときわ荘の漫画家達は横の連携で相互に助け合っており、編集者としては仕事を任せる上で安心感があった[7]。そのため、ときわ荘の漫画家達は必然的に仕事の機会を多く得ることが出来、その分技術や生産性が向上した。また、機会の多さは、自らのジャンルの確立という側面からも大きな利点であった。例えば赤塚不二夫は、当初なかなか芽が出ず、石ノ森章太郎のアシスタントのようなことをしていたが、あるとき石ノ森章太郎からギャグ漫画の原稿を融通されたことがきっかけとなり、自らのジャンルが確立され、一気に才能が開花した[4]。また、寺田ヒロオも、編集者からの依頼によって、偶発的に自らのジャンルを確立できた述懐している[11]。業界全体の需要増にも後押しされたとはいえ、仕事が著名人へと集中しやすい漫画業界において、機会が得られるということは、若手漫画家達にとっては何よりも大きなメリットであった。

次に精神的な側面であるが、ときわ荘の漫画家、あるいは有志メンバーは、フォーマル、インフォーマルに関わらず非常に頻繁にコミュニケーションをとっており、お互いのライバル心などが刺激され、モチベーションが向上した[10, 12]。また、仕事が行きたくない時は、互いに励まされることも多く、そのことが仕事を長く続けることが難しい業界において、モチベーションを維持する支えとなっていた[4]。

最後に技術的側面であるが、実はときわ荘のメンバー同士で技術的な情報交換をしていたという記述は少ない。インフォーマルなやり取りの中で、お互いの挑

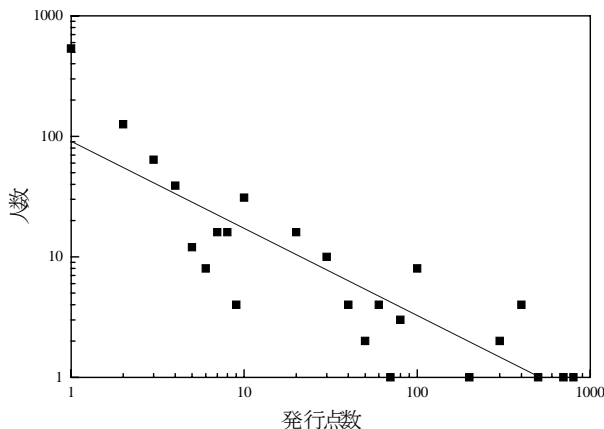


図 2. 漫画単行本の発行点数ごとの 1930 年代生まれの漫画家の分布

戦的な試みについて情報交換していたことはあったものの、主な会合の内容は、ときわ荘以外の漫画家の作品についての品評や、お互いのデッサンの比較などであった[4, 9-12]。むしろ重要なのは、そういった直接的な情報交換よりも、娯楽などを通じた間接的な能力の向上にあったと思われる[4, 10-12]。例えば彼らは、一人が話しの発端を作り、別の一人がそれを展開し、最後の一人がまとめてオチをつけるという「しりとりストーリー」という遊びを発明している。また、映画鑑賞や、文芸作品を読み、それらの情報を共有、議論することで、後年主流となっていくストーリー漫画作りに必要な能力を向上させていた[4]。

以上のことから、上京したての若手漫画家達が、将来の見通しなど全く立たなかった状況において、ときわ荘のシステムはまさにそのインキュベーターとして極めて効率的に機能したのである。

## 6. ときわ荘の解体

ときわ荘が解体される 1982 年のはるか前に、漫画家達はときわ荘から転出していた。その最大の理由は生活水準の向上である。前述したように、ときわ荘に漫画家達が入居したのは、財政上の余裕がなかったことが大きな理由の一つである。そのため、それぞれが漫画家としての実力を向上させ、生活水準が向上した際には、生活の場所兼職場としてのときわ荘は手狭になる。また、結婚によって伴侶を得た場合も、やはりときわ荘では暮らしがたい。つまり、漫画家達は必然的にときわ荘に集結し、必然的に転出していったのである。しかし、ときわ荘そのものがなくなったが、後のプロダクションシステムに通じる雛形としてのときわ荘のシステムは、ときわ荘から分散していった漫画家達が、それぞれ同様のシステムを作っていたことで後年へと受け継がれていった[4, 12]。

表 1. 1930 年代生まれの漫画家の発行点数順位

名前	発行点数	順位
藤子不二雄	845	1
石ノ森章太郎	763	2
水島新司	504	3
横山光輝	466	4
白土三平	445	5
ちばてつや	439	6
松本零士	404	7
椋図かずお	347	8
赤塚不二夫	305	9
さいとうたかを	266	10
水野英子	60	25
寺田ヒロオ	18	61
よこたとくお	13	74

## 7. まとめ

- ・新たなメディアへの適応性、受容性の高い世代の増加が新たな市場を生み出し、生産現場の方も自らその構造を変革することで市場の変化に対応した。
- ・市場動向、産業構造、個人的動機などによる、漫画家、編集者両者の極めて合理的な意思決定の結果として、ときわ荘を形作るメカニズムが生まれた。
- ・ときわ荘における人材成長システムは、生活の場を共有することによる、漫画家同士、あるいは編集者と漫画家との極めて綿密なコミュニケーションにより成り立っており、機会、技術的、精神的な側面で有効に働いた。
- ・ときわ荘そのものは解体されたが、そのシステムは次の時代に対応するためのロールモデルとして、後年のプロダクションシステムへと受け継がれていった。

## 参考文献

- [1] Joseph S. Nye, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*, PublicAffairs, 2004.
- [2] 竹内オサム, *戦後マンガ 50 年史*, 筑摩書房, 1995.
- [3] 岡田斗司夫, *オタク学入門*, 太田出版, 1996.
- [4] 手塚治虫&13 人, *トキワ荘青春物語*, 蝸牛社, 1995.
- [5] 国出版協会出版科学研究所, *出版指標年報, 1955-1975*.
- [6] 中野晴行, *マンガ産業論*, 筑摩書房, 2004.
- [7] 丸山昭, *ときわ荘実録-手塚治虫と漫画家達の青春*, 小学館, 1999.
- [8] R. E. Caves, *CREATIVE INDUSTRIES -CONTRACTS BETWEEN ART AND COMMERCE*, HARVARD UNIVERSITY PRESS, 2000.
- [9] 豊島区立郷土資料館編, *トキワ荘のヒーローたち*, 豊島区教育委員会, 1986.
- [10] 藤子不二雄 A, *トキワ荘青春日記-いつも隣に仲間がいた*, 光文社, 1996.
- [11] 梶井純, *トキワ荘の時代*, 筑摩書房, 1993.
- [12] 石森章太郎, *トキワ荘の青春-ぼくの漫画修行時代*, 講談社, 1986.